清らかなりて明けの明星

兎餅

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

偉大なる陰陽師、安倍清明。

彼が未来を見た時、物語は変化を告げる。

……といいなぁ。

目次

00　清らかなる明け ―― 1
天文にて明星は照らす。（前編） ―― 6
天文にて明星は照らす。（後編） ―― 15
曇天に笑いて、日輪は曇らず。 ―― 23
陽出づるところ、影はあり。 ―― 31
華咲く童うた ―― 46

００　清らかなる明け

「清明！　清明ェはおるか！」

一条戻橋の端に位置する、豪華な旅館も斯くやと広がる巨大な屋敷。

この京の都の大半を占めているのではないか、と錯覚する程大きな屋敷は、かの有名な当代最強と謳われる陰陽師、安倍清明（あべのせいめい）が邸宅である。

そのだだっ広い屋敷の廊を、一人の男が声を張り上げ急ぎ足で過ぎて行く。

平安装束を着込み清明の名を呼び付けるのは、清明が共に肩を並べるのを是とした無二の親友たる源博雅。

醍醐天皇の孫にして、醍醐の第一皇子である克明親王の子息だ。

「ええい！　どこだあやつは!?」

首を右往左往、体を縦横無尽に動かし目的の男を探すが、何処に行っても見つからない。

どこだどこだと呟いていると、屋敷にて雑務をこなしていた女中が声を掛けてきた。

「これは博雅様、ようこそおいでになさいました。拠ん所無き事情により、女中一同出払っておりましておもてなし出来ず申し訳ありません」

「いや、そんな事はよい。それよりも清明の奴が何処にいるか存じないか？」

「我らが主人なら、頼光様の元に遊びに出向いております」

「またなのか……」

「はい」

はあ、と息を吐き自由奔放な親友を思い浮かべ眉間にシワを寄せる。

安倍清明、当代きっての……否。過去現在未来において超えるものなき最強の陰陽師。

幼少のみぎり、賀茂忠行と夜行を共にした時に清明が鬼を見た事を

知った賀茂忠行は、彼に人智を超えた才を見出し陰陽道の全てを叩き込んだ。
清明が頭角を現すのに時間は要らず、齢十三にして清明は陰陽師となる。
以降は羅刹悪鬼を討ち、砕き、払い、時に率いて京の都の平安を守護し、未だに日ノ本国に住まう神々を調停した功績から、八年前に史上四人目となる生前での正一位を成した。
その当時清明は二十五歳という驚愕の若さであった。
まさに傑物。類を見ぬ英傑たる清明だが、そんな彼にも弱点はある。
それが先程の女中が申していた『頼光』なる童だ。
一条戻橋を挟み清明の住まいと向かい合うように建て構えた、これまた清明邸に負けず劣らずの屋敷。
そこな屋敷の主人源満仲が娘、源頼光を清明はまるで実の妹のように猫可愛がりしているのだ。
暇があれば……なかろうとも、仕事を放り出して遊びに行ってしまうと言えば、どれ程可愛がっているのか分かるだろう。
溺愛するのも程々にしろ、と博雅は何度も言い聞かせてきたがどうやら直すつもりはないらしい。
満仲も娘が生きる伝説に可愛がられるのは満更ではなく、余程の時しか止めに入らないのも、清明の行動を加速させている一因かもしれない。
再度、深い溜息を吐き出しながら、博雅は満仲邸に歩を進めた。
☆
幼少の……齢で言えば三つの時、俺は自分を理解した。
俺を産んだ慈しみ深き母、葛の葉の腕に抱かれながら、脳内に流れて来たのは一人の人間の記録と記憶。
誰のものか分からない、刻まれた一人の命の軌跡（モノガタリ）。
或いはそれは俺の生まれる前の記憶なのではと考えたが、今の時代では考えられない鉄の馬や、怪鳥の如き巨大な空飛ぶ鉄の塊が、路傍の石程にも珍しくもない世界だったのだ。

であるならば、あれはきっと前世(過去)などではなく、いつか遠い未来で生き抜いた、素晴らしい誰かの物語(軌跡)を幻視していたのだろう。
……楽しかった。
……面白かった。
……なにより、温かい気持ちになれた。
以来俺はこの不思議な両眼で、未来を見るのが母にも言わない密かな楽しみとなった。
五つの歳を迎えた頃、母が自身は白狐だと知れてしまい、信太の森に帰ってしまった。
母の置き手紙を読んだ父は、俺を連れて森に向かう事となる。
斯く言う俺もこの様な別れ方は、変わった子供ながら嫌であったことには違いない。
草根を掻き分け、小さな体で必死に父の背に続く。
母の元に辿り着いたのは、落陽を迎え辺りが静寂の闇に包まれた頃だった。
深い深い神秘的とも鬼胎的とも言える森の最奥。
そこに俺を溺愛していた母は居た。
俺よりも長い付き合いである父と母は、両者共に言いたい事がある筈であろうに、しかし幾千の言葉は不要とばかりに短いやりとりで会話を終えた。
きっと俺では知り得ない何かが、確固たる信頼のようなものが二人の間にはあったのだろう。
俺も結局母とは二言三言交わしたのみで、普通の親子が費やす会話の量にも満たなかった。
……だが、母はすまぬと俺に謝罪したあと。
――いつまでも愛しておるぞ。
と、一言だけ紡ぎ抱き締めてくれた。
それだけで十分だった。
母の愛を受け、彼女の心配の要らぬよう強き者になろうと決心するには、まだまだ幼かった自分には、それだけで十分事足りたのだ。
別れ際に母から、宇迦之御魂神からの贈り物だという水晶の玉と黄

金の箱を貰い受け、次の日より俺は童子丸改め清明と名乗るようになった。
清らかなる明けよ、京を、日ノ本を、俺を照らせ、母が心配せぬように、とそんな願いを込めて。
☆
「見つけたぞ清明！」
ドタドタと凡そ貴族らしからぬ足取りで、満仲邸の庭園に向かってみれば、まだあどけない無垢な少女と蹴鞠をして遊ぶ一人の男が居た。
平安装束とは少し違った、何処か未来の着物と呼ばれる服に近しい装束に身を包み、男は少女に何か言ったあと博雅の方を向く。
「やれやれ相変わらず忙しないやつだな、お前は」
薄ら笑いを浮かべ、肩を少し竦める芝居がかった動作を行う。
男は光沢のある美しい黒髪に、幼さが抜けたばかりの整った顔立ちをし、宝石に勝る艶かしい桔梗色の双眸を宿している。
紫陽花を思わせる雄々しくも美しいこの青年のような男が、御歳で３２になる安倍清明だった。
母の血筋か、清明の容姿は青年期の中頃で止まってしまい、いつまでも若々しい姿を保っている。
音に聞こえし安倍清明がかように若き男であるとは思わない為、初めて清明を目にしたものは必ず驚いている。
「そんな事はどうでも良い！　それよりも清明お前、今日は何の日か忘れた訳ではあるまいな!?」
「……はて？」
「な!?　貴様！」
顎に手を当て態とらしく首を傾げる清明に、青筋を浮かべ憤慨する。
ワーギャーと怒髪天を突きかねない勢いの親友を見ると、ぷっ、と吹き出し笑い声をあげた。
何がおかしいのか、清明の態度に怒りを顕にしていると、すまんすまんと清明が謝りながら声を発した。

「今日は貴族様方に呪術を見せる約束の日、だって言いたいんだろう？」
「分かっているのならばなぜ向かわぬ!?　刻限はとうに過ぎているぞ！」
「そう声を張り上げるな博雅。既にその件は終わらせた」
「……なに？」
「だから、転移ですぐに移動して星の光が如く終わらせてきたのさ」
どうだ、と胸を張らんばかりにドヤ顔を決める清明。
そうだった、そう言えばこの男はこういうやつだった。
面倒な事は常に後回しで、どうしてもしなければならぬ事は瞬きの間に終わらせていく。
それもきっと頼光と遊びたかったから、などと言う我儘のような理由なのだろう。
だが悲しきかな、清明は鬼才であるが故になんでも出来てしまうため、博雅は責め立てることが出来ない。
このままでは寿命が減りかねないスピードで、博雅の中にストレスが蓄積されていく。
「さあ頼光、蹴鞠の続きをするか！」
「はい清明お兄様！」
将来はナイスバディを通り越して、母性オバケの英雄となる一人の少女の手を取って清明は再び遊びに勤しんだ。
どこまで行っても自由な親友に、博雅は諦めたように天を仰いだのだった。

天文にて明星は照らす。（前編）

「清明ぇー！　清明ぇー！　あっれ、ここにも居ない……」

快活な声が廊下を吹き抜けて行く。

踊るような明るく心地の良い声は、橙色の髪を束ねた少女。

人理焼却の試練へ英雄伴い抗い、偉業を成し遂げた――人類最後であったマスター。

七つの特異点を修復し、そしてついこの前に下総国での剣豪事変を収束させたばかりのマスター・藤丸立香。

彼女が声を跳ねさせ呼ぶ名は、人理修復の出発点から今まで共に進んできた最古参のサーヴァントだ。

今回は彼の力が必要だ。

このカルデアには古今東西数多の英雄達が召喚されているが、その中でも初めに召喚に応じ、相応の時間を過ごしてきた安倍清明は段違いに信頼が厚く、ただの主従以上の関係であった。

清明本人がどう思っているかは知らぬが、少なくともただのマスターとサーヴァントという関係性ではないと立香自身は思っている。

「どうかなされましたか、先輩？」

キョロキョロと周辺に視線を配っていると、対面からドクターの診断を終えたばかりの後輩系デミサーヴァントが、顔を伺いながらやって来た。

「あ、マシュ。今清明探してるんだけど、見なかった？」

「清明さん、ですか。すみません、私は見ていません。でも清明さんをお探しとは、何かあったのでしょうか？」

「何かあったというか、これから起こりそうというか……」

「……？」

何処か辟易とした空気が混ざった言葉に、要領を得ないマシュは小首を傾げた。

だが、次に立香が口を開いた時、疑問は氷解し得心が言ったように苦笑いを浮かべることとなる。

「頼光さんと酒呑がね」

「あぁ、なるほど。お察ししました」
酒呑童子と源頼光。
この二人の名をセットで聞いただけで、もう何もかもが察せた。
要は水と油に何かあったのだ。
あの二つ改め、二人は混ぜるな危険ということはカルデア内の誰でも周知していることである。
合わせたら最後、互いに殺し合いを始めてしまう為に、普段はすれ違わせるどころか会話の時でも意図してお互いの名前は出さないように心掛けている。
それは周りだけでなく、頼光と酒呑童子も互いに意識して片方を避けているのだが、今回ばかりはなんかあったようだ。
「今は金時が何とか時間を稼いでくれてるけど、あとちょっとしたら噴火しそうで」
「あのお二人を完全に止められるのは、カルデアでは清明さんだけですからね。何か起こる前に清明さんを見つけましょう」
「うん。でも、ここに来る前に清明の部屋とか、シミュレーションルームとか行ってみたけど居なかったんだよね」
基本清明は気分屋である為、行動に規則性が無く一度姿を失うと見つけるのに時間が掛かる。
一つの場所に長く留まる時もあれば、五分も経たずにその場その場を移動する時もある。
少し前は読書にハマっていたようで、図書室によく出入りする姿を見ていたが今ではとんと見なくなった。
どうやら最近は別の物に熱中しているらしい。
そんなことはさておき、無闇矢鱈に歩いても仕方ない。
下手に時間を食えば幾ら頼光四天王の金時と言えども、肉食獣二匹に食い散らかされた生肉が如く、無惨な姿になってしまうかもしれない。
カルデアと金時の身と心のためにも、一刻も早く清明を見つけ出さねばならないだろう。
「いざとなったら令呪を……」

「先輩……そんなに令呪は気軽に使っていいものでは無いと思います。オルガマリー所長に怒られますよ」
「うっ、それは嫌かも」
　噂をすればなんとやら。そんな事を二人で話していると、会話に上がった人物がマシュと同じ方向から歩いて来た。
「あら、立香にマシュじゃない。貴方達こんな所で何をしているの？」
「あ、噂をすれば所長」
「お疲れ様です、オルガマリー所長。執務はもう終えられたのでしょうか？」
「いえ、まだです。小休憩がてら食堂に向かおうとしていた最中に、貴方達を見つけたの」
　顔を見れば確かに疲労が見えるオルガマリーは、大量の書類を裁くのに嫌気が差したのか一瞬だけ眉間に皺を寄せていた。
　始まりの面子。人理修復という無理難題を課せられた時に、そばに居てくれた大事な仲間。
　まだ魔術のマの字も、この道の常識も知らなかった頃から、お互いがお互いを支え合った初期のメンバー。
　今でもこの三人で話せるのは、やはり安倍清明という男のお陰だった。
　冬木市の特異点でオルガマリーがカルデアスに呑み込まれそうになった時も、その後の擬似第三魔法による肉体複製での蘇生も、全ては清明の卓越した力によるものだ。
　それだけでは無い、ロンドンでの魔術王の顕現も、終局特異点でドクターロマニが完全消滅を免れたのも、数え上げれば切りがないぐらい、清明には助けられている。
　ロマニは魔術回路の一切合切が消滅するという、魔術師としての死を代償としたが、今も笑いあって生きられるのだから安い代償なのだろう。
　不意に、立香は笑みが零れた。
「ちょっと、笑っているけど、先程私の耳は聞き捨てならない事を聞いたのだけど。「令呪を使う」だのなんなのと」

「げぇっ。所長の耳年増」
「っ、貴方ねぇ……！」
年増という単語を聞いた時、ピクリとオルガマリーの眉が吊り上がった。
「先輩、それは使い方が違うかと」
マシュは自身の先輩を見ながら、ため息を吐いた。
三人揃うといつもこんな調子だ。ある意味で、見慣れた光景に安心出来るというもの。
「まぁまぁともかくとして。所長～、清明見なかった？」
「……立香、覚えていなさいよ。はぁ、それで清明？　あの人なら先程廊下ですれ違ったけど」
「ナイス所長！　流石、役に立つ女！」
「ちょ、急に褒めだして何も出ないわよ。それで何があったの？」
「実は――」
説明を求める視線をマシュに向けると、直ぐに理解し要点を抑え語り出す。
そしてやはりと言うかなんと言うか、頼光と酒呑という単語を出しただけで大方の予想が付いたのか、面倒はごめんとばかりにオルガマリーは顔を顰めだした。
美人が台無し、とは行かないまでも、書類作業の後に問題を起こすのはやめて欲しいと切実に願っているのが分かるほど、顔に感情が浮き出ていた。
「そういう事なら、さっさと行って清明を呼びなさい。サーヴァント間の問題を未然に防ぐのも、マスターである貴方の仕事でしょう」
「分かってますよ。だから、令呪の使用をですね……」
「それはなりません！　もし何かあった時に令呪一画が命運を分けるかもしれないでしょう!?」
「えぇ、頭硬いー。一個くらい、いいじゃないですかぁ」
「あ、貴方ねぇ……！　もう一度一からマスターとしての基本を教育しなければいけないみたいね！」
「うぇ!?　それは嫌だ！　所長無駄に話長いしつまんないもん

！」
「ふ、ふふ、そう。そこまで私を怒らせたいの……」
ふつふつと、髪が逆立ち始めた所長を見て、マシュは呆れた顔を出さずには居られなかった。
「……先輩、こんなことをしている場合では無いかと」
いい加減時間が惜しいと思ったデミサーヴァントは、マスターを助ける意味でも直ぐに移動した方がいいと申し出る。
それもそうだと思った立香は、そそくさと逃げるようにその場を動き始めた。
所長がすれ違ったと言っていた為、大体の方向は予想がついている。
そろそろ急いで見つけ出さねば、金時は持たないだろう。
後ろから「待ちなさーい！」と聞こえる声を笑顔で無視しながら、マシュと立香は足早に廊下を進んだ。
怒らせてしまったお詫びに後でエミヤのお菓子でも持っていこうと、心で呟きながら、初めの頃より大分柔らかくなったオルガマリーに笑顔を零した。
☆
「アア！　また芋りですか!?　清明様、卑怯ですよ！」
「フハハハ！　勝てば官軍という言葉を知らぬのか貴様？　すなわち負ければ賊軍。芋ろうが、狙撃を使おうが、キル数を稼げば戦場では正義だ！」
廊下にいたサーヴァントに聞き込んでみれば、どうやら清明は半月程前に召喚したばかりの巴御前の部屋に入っていったという。
そして、その言葉を元にこうして巴の部屋に来てみれば、なんと二人はＦＰＳ系のテレビゲームに興じているでは無いか。
清明は相も変わらず着物と平安装束の間のような服を着ているが、対する巴御前はどうだ。ジャージ姿では無いか。
下総で見た炎よりも苛烈で刃よりも鮮烈な女傑としての影は、そこに微塵も感じなかった。
哀しきかな、これでも源平合戦に描かれた万夫不当の女武者であ

る。ジャージを着ているが、源氏の女傑である。
入室と同時に終わったのか、巴と清明が入口に立っていた二人に気付いた。
「来たか、マスター。俺を探していたみたいだが、遅かったな」
千里眼で見ていたのか、それとも魔術によるものか、どちらにせよ立香の来訪は予め知っていたらしい。
そして薄ら笑いを浮かべながら二人を眺めているのを見るに、立香達がここに来た理由も把握済みだろう。
意地が悪いとしか、言い様がない。安倍清明というサーヴァントの悪い点だ。
確かに清明は強く、博識で、間違いなくサーヴァントの中でも頂点に位置するだろう。
だが、その代わりに他人を揶揄う趣味があるらしく、困って振り回される事も少くない。
今回もそうだ。頼光と酒呑のことを知りながら、立香が自分を見つけるまで自分からは姿を見せない。
何故そんなことをするのか、前に聞いてみたことがある。
曰く、他人の困る姿は愛らしいそうだ。
これを初めて聞いた時は、変態かな？　と思ったのは内緒だ。
……まぁ、十中八九バレているだろうが。
「さて、ここまでだな巴。次までには、精々俺を見つけられるように鍛えておけ」
「むむ、それは挑発と取ってもよろしいので？」
「なんだ、源氏の女傑たる巴御前は挑発もなければ、気も奮い立たんのか？」
「……っ!?　言いましたね……！　ええ、ええ、いいでしょう。今度やるときはこの巴、清明様をギャフンと言わせてみせましょう！」
意気込む巴にフッとニヒルに笑って、改めて清明は立香達に向き直った。
絵画を思わせるほど整った顔立ちに光沢のある艶めかし髪、吸い込まれそうな程綺麗な桔梗色の双眸と黄金律を保ち続ける肉体。

身長は１７０程で止まっているが、幼さよりも艶やかな色気の方が強い佇まいをしている。
美丈夫の多い西洋のサーヴァントと比べても、色っぽさで劣っているということは無い。
むしろ清明の方が妖しさもある分、目を奪われてしまう。
魅了のスキルは持っていなかったはずだが、実はあるのでは無いかと疑ってしまう程度には人の目を惹き付けてしまう容姿をしていた。
何度見てもこの設計された人形のような美しさに、立香は引き込まれてしまう。
「さて、では食堂に行くとするか。頼光も酒呑も金時も、そろそろ我慢の限界であろうよ」
「やっぱり知ってたんだ。だったら清明から来てよ」
「博雅みたいな事を言うな、立香。お前が慌てる姿がつい愛らしくてな、許せよ。老人の楽しみだ」
「清明さんは老人と言える程の外見では無いと思います」
何も無い真っ白な道を歩きながら、他愛も無い会話をする。
少し苦笑いを浮かべながら、事実を指摘するマシュに清明はつまらなそうに呟いた。
「二人揃って博雅の真似事か？　事実というのは、述べるだけ詰まらん音の羅列だぞ。もっとユーモアを持ってみろ。少しは会話が愉快になるやもしれんぞ？」
「はぁ、ユーモア……ですか？」
「ああ、何も虚偽や真実だけが言葉ではなかろう。比喩表現、揶揄、冗句、挑発、感情を揺さぶる音の呪だ。故に言葉。故の言ノ葉。中でも日ノ本の言語は多様性に含んでいる」
多様性という単語に、頷きながら肯定の意を示すようにマシュは返した。
「確かにそうですね。日本語は、同じ言葉でも発音や状況によって捉え方が変わる場合が多いと思います」
時折こうして、清明は面白いことを語る時がある。マシュの好きな時間だ。

外の世界を知らなかったマシュ・キリエライトに取って、千里眼を持ち遍く全てを実体験のように見て、感じて、理解した清明の話は本を読むよりも楽しい。
人理の旅でも野営での火の番をする度に、こうして寝物語代わりに話を聞いていたほどだ。
会話を好む清明の人柄だろう、他人に何かを教示するとき優しい顔で楽しそうに話す。
何度この顔に救われただろうか。何度この声を聞きたいと思っただろうか。何度、この人の隣に居たいと思っただろうか。
親兄弟の温もりを知識でしか知らぬ少女（マシュ）にとって、安倍清明は兄に近しい人物だった。
「そうだ。例えば〝神を咬み殺す〟とかな。神代の世なら、これだけでも力を持った魔法となっていた」
「それは……」
あまりの物怖じしない不敬な態度に、苦笑いを浮かべるしかなかった。
カルデアには英雄だけではなく、神霊のサーヴァントも呼び声に応じ召喚されている。
神と言えば人間の傲慢を嫌い、常に畏敬の念を持って接していなければ激昂するような存在が多い。
例を挙げるなら女神イシュタルがそうだ。
メソポタミアの問題児にして主神の娘。人間の肉体を依代にすることで、幾らかその性格は鳴りを潜めているが。
根本の所は変わっていない。高慢女神は、高慢女神のままだ。
そんなサーヴァントに今の清明の発言を聞かれていたら、きっとただじゃ済まない。
それを分かっていて、マシュの困り顔が見たくてこの男は言ったに違いなかった。
……だって顔がニヤニヤと笑っているから。
「ユーモアとはこういう事だ」
「私は違うと思います！」

そこだけは猛烈に抗議した。

天文にて明星は照らす。（後編）

「――羽虫風情がッ！」

「嫌やわぁ。牛がもうもうと鳴きよるさかい、五月蝿くて敵わんわぁ」

食堂の中は、静謐なる敵意と苛烈なる殺意によって支配されていた。

片手に酒を持ち、それそのものが攻撃力を持つ殺意を受けてなお、蔑んだ笑みで受け流す鬼が一匹。

抑えきれぬ激情と殺意の奔流に押し流され、今にも腰に携えた天下五剣が一振を抜きかねぬ英傑が一人。

鬼の名を酒呑童子。童女の姿色をした悪鬼羅刹、大江山の魑魅魍魎が首魁の反英雄なるや。

幼く一見して子供と間違えるその姿からは、しかして幼い故の愛らしさなど微塵も無く。見た目に反して、今も片方の殺意を相殺する程の圧をぶつけていた。

片や、ただの女人に非ず。彼の英傑の名を源頼光。

名高き源氏が英雄の一人。土蜘蛛退治、浅草寺の牛鬼、そして頼光四天王による大江山の鬼退治。

異形殺しここにありと平安に轟し大英雄なりて、鬼嫌いの性を身に宿す女人である。

「ちょっ、待った待った！　　頼光の大将も刀抜くなって、ここは食堂だぜ!?」

両者の圧の中心に立ち、折れそうになる心と膝を気合いと責任で押し止めているのは、二人と因縁浅からぬ坂田金時。

日本昔話に有名な金太郎であり、浦島・桃太郎に並び最も有名な童話の主人公だ。現代日本でもこの話を知らぬものは居ないだろう。

しかし、そんな有名な英雄であろうとも――否。金時であるからこそ、酒呑童子と源頼光という地雷原に立たされれば、冷や汗も滝のように出るというもの。

美丈夫な体躯も情けない事に、今は何の役にも立っていなかった。

内心ではもう何度悲鳴を上げ救援を求めたことか。早く呼んでき

て来れマスター、と。
そしてそんな胸中に答えるようにして、その男は現れた。
「は、随分と愉快な事になっているではないか。なあ金時」
「――旦那(ボス)！」
ぱあっと、花が咲いた。
その時の金時の顔は、まるで神を初めて目の当たりにした信者のようだったと、後に立香は語る。
そして、敏感に反応したのは金時だけでは無い。
騒動の二人もまた、清明の気配を感じた瞬間に視線を其方へ向けた。
「お待たせ金時(ゴールデン)、ご苦労さま」
「助かったぜマスター。あと少し遅れてたらどうなってた事か……」
「お疲れ様です金時さん」
「おう、マシュも呼んできてくれたのか。ありがとうな」
「いえいえ、私は何も。先輩に付いて行っただけですから」
ほっと息をつきながら、安心して酒呑と頼光の元を離れ立香達の傍に行く金時。
余程精神を疲労したのか、汗で前髪が額に張り付いていた。
そんな金時を「大変だったね」と言いながら、立香は流し目で食堂の中を見渡した。
いつもならわんやわんやと楽しく騒がしい食堂だが、今は誰もが離れた場所からこちらを眺めている。
面倒に巻き込まれたくない者、この喧嘩を肴に酒を仰ぐ者、単純に煩いから食堂から出ていく者、実に様々である。
厨房を見れば、調理する手を止めずにエミヤがこちらを睨んでいた。
(ああ、あれは「喧嘩ならシミュレーション室(外)でやりたまえ！」とか思ってるんだろうなぁ)
そんな事を思いながらも仲裁に入らなかったのは、自分は部外者だと理解しているからだろう。
流石にここでおっぱじめそうになったら止めには入るだろうが、そ

れまでは事の成り行きを静観していたという所か。
たまたまルーラーのクラスがこの食堂に居なかったのも、喧嘩が続いた理由だろう。
間に合って良かったぁと心底思いながら、立香は視線を戻した。
「貴様ら面白いことをしているではないか。一応聞くが、ここはシミュレーションルームでは無いことは、理解しているよな？」
「牛女やあるまいし、脳にも脂肪は詰まっとらんさかい、そこまで耄碌してへんよ」
「なら何よりだ。それで、一体何があった？」
「千里眼持ってはる清明はんがそれを言うなんて、ほんまいけずやわぁ。本当は知っとるんやないの？」
「さぁな、俺とて偶には目を休めたくなる時もあるかもしれんぞ」
生前から繰り返される言葉回し。
相手がこう言えばこう返すと相互に理解し合っていることが、今のやり取りから窺い知ることが出来る。
それもその筈、安倍清明と酒呑童子は生前に一度、主従の契約を結んでいたのだ。
それは、利害の一致から結ばれたたった一度の契約であった。
しかしほんの一時、ひと月の時間にも満たない刹那の間だけだったが、確かに互いの気心も趣味嗜好も理解するには十分な時間であった。
「お兄様、そこをお退き下さい。害虫の駆除をしなければなりません。ええ、食堂であるのならなおのこと。衛生的に塵の排除（そうじ）をしなくては、金時もマスターも安心して食を取れないでしょう」
そう言って、怜悧な視線を奥の鬼に向ける頼光。
金時やマスターの為と言っているが、酒呑からすれば兄に構ってもらえず嫉妬をしているようにしか見えなかった。
いや、実際には金時やマスターの為というもの本当ではあろうが、やはりそれ以上に清明が酒呑童子と話しているのが気に食わないのだ。
「愛しいお兄様も、あんたは乳臭くて敵わんらしいわ。そら、これを機

に兄離れをしはったらよろしおす。そしたら連鎖して、子離れも出来るようになるかもしれへんよ？」
「……このっ！」
「くく、これこれ、煽るな酒呑。これはこれで成長したなりの愛嬌とやらがある」
「……妹が妹なら兄も兄どすなあ」
呆れたように笑いながら、手に持つ酒を一口飲む。
清明の頼光溺愛は今も昔も変わらず健在なようだ。
もしここに博雅が入れば、眉間を押え愚痴のひとつでも零していたことだろう。
はてさて、酒呑には少し黙ってもらい。次いで清明が目を向けたのは、大きく成長しきった頼光だった。
「まったく、俺より大きくなったというのにお前は。俺が構わなければ泣き出すのは変わらずか？　　ん？　　母としてあるなら、もう少し気丈になったらどうだ。器広く母強し、とな」
仕方ないやつだな、といつもとは違う種類の笑みを浮かべた。
それは親が子に向けるような、呆れとも怒りとも違う暖かいもので。
源頼光という人間はこの顔にとても弱かった。
それはある日を境に父、源満仲から父親としての在り方を強制されたからなのか、それとも父以上に父の役割を果たしてくれた清明の顔だからなのか、頼光自身には判断が付かなかった。
しかし一つ言えるのは、例え狂い果てようとも、きっとこの顔には敵わないのだろうということだ。
だってほら、先程までに荒ぶっていた感情の波が徐々に凪いでいるのだから。
「しかしお兄様！」
「はは、随分と食ってかかるな。ともすれば子供の時よりも我儘になったか？　　それはそれで俺としては愛らしいが。そら、また兄様（あに）と蹴鞠でもして遊ぶか頼光？」
「あ、あぁあ……！　　おやめ下さいお兄様、金時達の前です」

「恥ずかしがる事はなかろうよ。親にも誰しもが子供だった時はある。その時の事を語って聞かせられるのも年長者の特権というやつだ。どれ立香、頼光の幼く花のようだった時の話を聞かせてやろうか？」
ニヤリと笑って、視線を立香に向ける。その時、ピンッ！　とこの視線の意味を立香はすぐさま察した。
「聞いてみたい！」
この声が決定打となった。
神秘殺し、異形殺しの女傑源頼光は立香の言葉を耳にした途端、頬を赤く染めた。
バーサーカーという精神に矛盾や狂気を孕むクラスでありながら、羞恥という感情をただの言葉のみで清明は引き出したのだ。本来は狂化に呑まれ尽くす感情を、意図も容易くだ。
そこにはなんの魔力も特殊な魔術もなく。言葉回しだけで、一級の狂戦士の殺意を削ぎ落とした。
他の誰にも出来ない、清明だからこその芸当である。この会話術だけで窮地を凌いだ場面も少くない。
初めの頃の特異点での旅では、現住民とコンタクトを取る時は専ら清明に頼りきっていた。
「おおう……流石は旦那(ボス)だぜ。あの頼光の大将の殺気を、あんなにもあっさりと……」
「あの二人って、昔っから仲良いんだっけ？」
プルプルと恥ずかしさから震え出した頼光を見ながら、立香は何となく口に出した。
「あん？　　頼光の大将と旦那(ボス)の事か？」
「うん」
「ああ、なんでも旦那は大将が生まれた時から溺愛してたらしいぜ。俺が旦那に会ったのは、四天王となった後だから聞いた話になっちまうがな」
「史実では、確か清明さんは頼光さんが幼い頃は百にも及ぶ式神を使って、子守りや遊び相手をしていたみたいですからね。歴史に残る

溺愛っぷりです」
「百の式神……」
話を聞いて立香は想像をしてみるが、あまりのスケールの大きさに上手くは想像出来なかった。
安倍清明と言えば、無数の術式と式神を使い平安の世を守り続けた、偉大なる陰陽師という話が強いが。
実際に関わってみれば、あきれ果てる程に自由人だということが分かる。
立香のサーヴァントの一人である玉藻の前も、彼の名前を口にすれば顔を顰め辟易とした顔をする。茨木童子に言えば、怯えたようにプルプルと震え出す。
自由奔放傍若無人、加えて完璧超人と来れば三拍子揃ってもう無欠だ。
それは英雄王も認めるに足るというものだ。
「で、だ。ここは俺に免じて流せよ、酒呑」
「それは納得いかんなぁ。清明はんが来るまでに、頼んだ酒がそこな牛女の殺気で吹き飛んで消えてしもうたんよ。そこそこきゅーぴーが掛かるやつでな、なんかしてもらわんと割に合わないわあ」
目を細め、ここぞとばかりに要求を突き付ける。
これが普段なら笑って流すが、今回はこれを利用する腹積もりだ。
こう言えば、間違いなく清明は乗ってくるから。
酒呑童子がここまで清明にこだわるのは、コレクターとしての彼女の性質だ。
イケメン好きである彼女は、生前その美しさから清明を手に入れようとしたが叶わなかった。
それどころか誘っても誘っても袖にされてしまう。
しかしそんな事をされれば更に燃えるのが、鬼の強欲というものだろう。
幾百幾千と人間を本能のまま喰らい続けてきた。だが、ああ、手に入れられなかったそれを喰えたなら、それはどれ程の幸福感なのだろうか。

如何程の充足感なのか。きっと出来たなら、三日三晩は踊り続ける程の達成感が湧き上がるに違いない。
ならばこそ、手に入れてみせよう。
それが大江山の首魁、酒呑童子という鬼の本能なれば。
「……偶にはそれも一興、か。いいだろう、オルガマリーに頼んでレイシフトの許可を貰っておこう。なに、酒も俺が用意してやるから、お前さんは手ぶらで来るといいさ」
僅かだけ何かを考えると、次には首を縦に振った。
清明が何を思って頷いたかは知らぬが、ともかくとして酒呑童子の思惑は見事成功したことになる。
しかし、そうなれば納得がいかないものが一人。
「清明お兄様！　何故そんな虫と――っ!?」
言葉を遮るように、清明は頼光の頭を撫でた。
「無駄に大きくなりおって。撫でづらいぞ、頼光。なに、すぐに戻る。帰ったらマスターと金時と一緒に夕餉でも共にしよう」
「……約束ですよお兄様」
「ああ。約束だ」
クツクツと、いつも通りの本心が分からない笑みを貼り付けながら、照れる頼光を見上げる。
撫で終わる頃には、気が付けば酒呑童子は消えていた。
そこは出来る鬼、空気を読んで退場したのか。はたまた単に飽きただけなのか。
どちらにせよ、これにて一件落着の模様。
言葉巧みに物事を有耶無耶にしたり、調停をしたりするのはこの男の十八番である。
激烈な鬼である酒呑童子を知っている。猛烈な武将である源頼光を知っている。
だが立香は何よりも、清明のその偉大さを知っている。
獰猛なはずであるあの二人を、なんの力も使わず無血解決したのがその証であろう。
改めて、自分の歩んできた道に彼がいてよかったと思ったのであっ

た。
「で、結局喧嘩の原因はなんだったのでしょう？」
「ああ、それはそのう……オレのプリンを横から酒呑童子が食っちまったのを、大将が目撃しちまったからだ」
「頼光さんが間接キスにブチ切れたんだよ」
「ええ……」

曇天に笑いて、日輪は曇らず。

爛々と輝いている。
今も昔も変わることなく、空に上る月は美しく咲いている。
綺羅綺羅と瞬いている。
私を見てと、星々が命の光を放ち続けている。

「不変あらじ、常移ろい往くが人の世……」
「なぁに気取ったことを言ってやがるんでしょう。物思いに耽るほど、人間ではないでしょうに」
「くふ、減らず口は相変わらずか――狐」
小高い丘に建てられた、こじんまりとした小さな屋敷。
優しい匂いを感じる日本家屋の縁側に座り、二つの影が夜天を見上げていた。
杯を右手に遊ばせ、月光（つきびかり）に酔いしれるのは安倍清明。
口角を吊り上げ本心を悟らせぬ笑みを貼り付けて、隣から聞こえてきた声音を鑑賞代わりに酒を傾ける。
声の主を見てみれば、未だに納得のいってない顔をしながら、しかしどうにもならないことに半ば諦めた表情をしていた。
天照の化身、狐の化生、良妻賢狐。
清明と同じくキャスターのクラスにて現界した傾国の美女、八野鎮石が玉藻の前だ。
「はあ……どうしてこうなったのやら」
零れた言葉には、やるせなさが多分に含まれていた。
全くどうして、ことここに至ったのやら。
玉藻の前は清明と同じように月を見上げ、彼の晩酌に付き合いながら、ここまでの経緯を振り返った。
☆
「げぇ……」
それは全くの偶然だった。
普段から意識して避けてる訳でも、互いに嫌悪しあっているが故に

会わなかった訳でもない。
なのでいつかはこうなる事は分かっていたし、カルデアという狭い拠点の中では寧ろ今の今まで会わなかった方が、とてつもない奇跡と言っても過言では無いだろう。
いずれは会うと、そう頭では分かっていたが……実際にそうなってみれば、おおそよ乙女らしからぬ声が出てしまった。
そんな事を玉藻の前は考えながら、廊下であってしまった男に視線を向けた。
「随分な挨拶だな、狐」
何も感じてなさそうな人形みたいな顔を見て、玉藻は自然と自分の顔が苦くなっていくのを感じていた。
対して清明は玉藻の顔を見ながら楽しんでいるのか、意地の悪い笑みを崩さずにいる。
人の嫌がることほど、面白いものはない。
ことそれが〝玉藻の前〟という女なら尚のことかもしれない。
「相変わらず根の国色の魂をしてやがりますね」
「お前は相変わらず陽炎のような日輪だな」
「前から思っていましたが、貴方のその私への評価は分かりづらいですね……」
「なんだ、俺の評を詳しく知りたいのか？」
「いえ、遠慮しておきます。どうせろくなものではないでしょうし」
「さあどうだろうな。少なくともお前に対しては半々と言う所か」
「……っ」
うっと、清明の言葉にバツの悪い顔になる。
全く性格の悪い。今の玉藻をして、この男はやっぱりやりづらいことこの上ない。
そうだ。この男は昔から目がよかったばかりに、他人の芯を見抜く事に長けていた。
人里に玉藻の前が現れた時も、たった一発でその〝正体〟と〝存在〟を看破した。
当時は害無しと泳がされていたことが分かった時、物凄く腹が立っ

たのを覚えている。
今も悔しい思いで一杯である。
「やっぱり苦手です。見た目は好みですが、魂が失格！　くたばれ☆」
「くく、くふふ。こちらの狐には嫌われたものだな。獣狐(じゅうこ)の方には、それなりに懐かれている筈なんだが」
「……ああ、あれは私の割かし純真な部分ですからね。貴方とは関係が関係ですから、その当時の何かを本能で理解しているのでしょう」
獣の特性が強い狐、訳して獣狐(じゅうこ)。
エミヤやブーディカと並び、いつも厨房にてその腕を奮っているタマモキャットのことを、清明はそう呼んでいた。
タマモキャットは玉藻の前――九尾が神格を切り外し分離した尾が、それぞれの御魂として英霊化した存在である。
故にある意味で玉藻の前であり、そうでも無い存在とも言えるが。
タマモキャットに懐かれているという清明の言葉が本当なら、オリジナルとしては少し顔を顰めざるを得ないだろう。
まあ、それも仕方ないといえば仕方ないのかもしれない。
何故なら――。
「……」
玉藻の脳裏には、ある記憶が過ぎ去った。
――それは確かに私なのですが……。
その記憶を見て、自嘲気味に笑うしかなかった。
「これも何かの縁。俺の月見酒にでも付き合え狐」
「おや、これは意外や意外。どういうおつもりでしょう。彼の安倍清明がこの私を晩酌に誘うなど、は！　もしや凶兆の先触れでは？」
「ふふ、かもしれぬな。何、お前としては凶兆かもしれぬが、俺としては少し思うところがあっただけだ。お前の顔を見れば、な」
「……っ、それ馬鹿にしてます？」
「ほざけ、これは口説いているのだよ」
「はあ、貴方という人は……」
暖簾に腕押し。

どんなに言葉に鋭さを持たせようが、拒絶の意を含ませようが、この男には関係ないのだ。
自分がしたいことを好きなだけする。昔っからその所は変わらない。変えてはならない安倍清明という男を形成する、絶対なる芯。
玉藻の前を迫害したのも、その後のことも、この男の中にある自分の基準に従った結果だ。
まあ、確かにあれはどれほど時が経とうが許すつもりは無いが。
かと言って仇敵で関係性が止まるかといえば、またそれも違うと玉藻の前は断言できるだろう。
ようは、二人は色々と複雑なのだ。
「私に拒否権あります？」
「あると思うか？」
したり顔でそう言われてしまえば、もうどうする事も出来なかった。
あとはあれよあれよと流されるままに、話は冒頭に戻ることとなる。
☆
「出自が出自とはいえ、我ながらほとほと狐とは縁がある」
クツクツと喉で笑いを転がす。
手に持っていた杯を少し傾けると、小さな鏡に映った月が揺れた。
――ヒュウ、と風が童を思わせる足取りで二人の頬を撫でた。
心地良い金風。小高い場所にあるこの家屋から、眼下に広がる稲が踊るように体を揺らしている。
ダ・ヴィンチに言ってレイシフトしたのは正解だった。
シミュレーションルームでも似たような事は出来るが、それは所詮虚構で出来た紛い物だ。
風の運ぶ匂い、肌に感じる静寂、視界に映る世界、月見酒をするのならやはり実在するものの中でこそであろう。
加えて横には傾国など容易い美女が共にいるのだから、文句などあるはずが無い。
「肴の一つでもあればいいのだが……」

「嫌味な男ですねぇ。初めから男らしく作ってくれと言ったらどうなんです？」
「ほう、貴様にものを創る程の腕があるのか？」
「あは！　呪っちゃうぞコノヤロー☆　昔の私とは違うってんですよ」
「ふふ、そうか」
飽きもせずに玉藻を揶揄いながら、静かに顔を綻ばせる。
もう何度目かになる溜息をつきながら、玉藻は家の奥に消えていく。
清明は何も言わず、揺れる稲穂を眺めながら待っていると、料理を抱えた玉藻が戻ってきた。
予め作ってあったのだろう。丁度よく熱が覚まされた料理は、これまた定番の団子とクリームコロッケだった。
「すまぬな」
口を突いて出てきたのは、それだった。
「それは何に対してですか？」
「肴の手間に決まっているだろうが」
「そうですか」
その程度のことで清明が詫びることなどは絶対無いと、玉藻は知っている。
しかし、それを口に出すことは無かった。
もしそれを口にしてしまえば最後、玉藻の前は清明を殺さなくてはならなくなる。
実力どうのこうのと関係なく、そうしなければならなくなるのだ。
自身の矜持故に。清明と玉藻の前という人間の亡霊故に。
安倍清明は後悔をせず、懺悔をせず、悲観をしない。
それは実力者であるからではなく、また千里眼を持つからでもない。
そうあって当然と、そういう風に自分を定義しているからこそ、彼は最高位のキャスター足り得る。
しかしそんな彼でも、間違いを犯さない訳では無いのだ。それを玉

藻の前は理解している。
狐との間に生まれた鬼才。神性を宿す人型。人でありながら人ならざる化生。魑魅魍魎集う百鬼夜行の主。
人がどう彼を呼ぶのか知っている。対等な人間など存在しないのだ。
だからこそ源博雅は、清明にとって特別なのだから。
「音色が無いのは少しうら淋しいな。こい、『蜜虫』」
清明が呪を唱えると、月光に包まれ一人の女が現れる。
平安装束に身を包んだ、藤の音精。
清明が名を与えることによって形を持った人型の式神は、名を蜜虫。
琵琶を抱え、音奏でる可憐な女性が姿を見せた。
「ご機嫌麗しゅうございます、清明様。この蜜虫をお呼びということは、琵琶でしょうか？」
「ああ。酒はある、肴も来た、美女も居る。なら後は風情を整えるだけだ」
「かしこまりまし……あ、あぁ!?」
恭しく頭を下げようとした蜜虫は、突然声を上げ目を見開いた。
そして口元をパクパクと、まるで餌をねだる鯉のようにさせて……。
「ま、ま、ま……――真葛様！　真葛様ではありませんか!?」
玉藻の顔を見て、そう声を弾けさせた。
「真葛様も召喚されていたのですね！」
顔に花を咲かせる蜜虫に、玉藻はなんと言えばいいのか分からなくなる。
自分は玉藻の前だ。
だが、真葛ではないとは言いきれない。それもそのはずだ。
何故なら、真葛とは迫害されたその末の玉藻の前の事なのだから。
かつて藻女（みずくめ）という名の女が居た。１８歳で宮中に仕える、歳若き少女。
それは後に、鳥羽上皇に仕えてから玉藻の前と名乗るようになる女

のことであった。
その美貌と博識ぶりから寵愛を得るようになったとされたが。
しかし鳥羽上皇が病に倒れた際、その原因を調べた陰陽師、安倍清明によって「人間ではない」ことが発覚。宮中から追い払われる結果となる。
その後、朝廷の討伐軍と那須野の地で激突。一度目は八万からなる軍勢を退けたが二度目の戦いで敗北し、その骸は「殺生石」と呼ばれる毒を放つ石になったと言われる。
これが歴史。玉藻の前という女の辿った史実。
――だが、それが真実ではない。正鵠に語るならば、玉藻の前自身は殺生石にはなっていないのだ。
「……ふっ」
清明は思い返すように、鼻を鳴らした。
その当時、八万を超す軍勢を退けた玉藻の前に脅威を覚えた朝廷は、清明に泣き付きその討伐を命じる。
これに応じた清明は、単身で玉藻の前へ向かったのだ。
史実と違うのはここから。確かに、清明は呪を振り撒く玉藻の前と戦い、まる二日の激闘の末下すに至った。
しかし、殺すことはしなかった。
それは母の面影を重ねたのか、それとも憐憫によるものかは分からないが、確かに命を奪うことはしなかったのだ。
代わりに奪ったのはその咒。玉藻の前という神号を剥奪し、ただの女に落とした。
斯くして清明は朝廷に赴き、討伐の証として玉藻の前の髪を献上したとされている。
そして、妖狐討伐のその翌年の事だった。大化生を討伐した陰陽師、安倍清明は傍らにそれはそれは絶世の美女を妻にして侍らせていたという。
それこそが真葛、名を奪われ、しかして新たなる名を得た玉藻の前のことであった。
「――玉藻の前。古き知り合いだ」

その時、初めて玉藻の名前を呼んだ。
「真葛ではないさ」
答える主に、蜜虫は少しの間言葉を控えて。
「はい、分かりました。申し訳ありません、玉藻の前様」
主の意に添って、そう頷いた。
自身の仕えるべき主がそういうのだから、それ以上は何も言うまい。
出過ぎたことをするつもりも、この二人の関係をほじくり返すつもりも蜜虫には無いのだから。
「いえ、大丈夫ですよ蜜虫ちゃん」
まったく、気を遣わせてしまったようだ。
いつの世も、玉藻という存在は清明とは切り離せないらしい。
燦々と奏で始めた琵琶の音に感じ入りながら、玉藻はそっと瞳を閉じた。
「変わりませんね――アナタ」
呟かれた言ノ葉は、琵琶の音に包まれた風に乗せられ、月へと上った。
それを清明が拾っていたかは、誰も知らず、また知る必要のない事なのだろう。

陽出づるところ、影はあり。

きっかけは清明とスカサハの会話からだった。
「時に清明。お主なら、私を殺すことが出来るか？」
「ふむ、唐突だな。だが、そうさな……その問いには、こう返そう――可能だよ」
刹那に影の国の女王の眼に、魂穿つ鋭さが宿ったことは、言うまでもないだろう。
場所は食堂。中央から少し逸れた卓で向かい合うように座りながら、昼食を済ませた後の会話がこれだった。
「して、藪から棒に話題を振ったのは、泰山府君祭のことでも耳にしたかな」
「ああ、そうだとも。たまたまその手の話をすることがあってな、聞けば魂だけであったオルガマリーを蘇生させたのは、それによるものだとな」
浴びせられる極大の闘気をそよ風のように受け流し、平然と会話を続ける。
例えどれほどの英雄であろうと身を竦ませてしまうほどの圧は、しかし肌で受け止めていながら楽しんでいるようにすら見える。
事実、清明としては当てられる圧など、そよ風と大差の無いことであった。
凜然と顔色を変えることすらなく、こちらを見据える桔梗色の双眸を見つめ返しながら、スカサハは続ける。
「本来、魂に干渉するということは魔法の領域、神にのみ許された特権だ。だが、お主なら出来るのであろうよ」
「……つまりはこうか。肉体ではなく、直接魂魄に干渉出来る故に、俺ならお前を殺しうると。それで、先の話か？」
「うむ。お前も私の願いは知っているだろう？」
スカサハの願い、それは死ねない己の死を迎えること。
人理焼却のおり、彼女が立香の声に応じたのは、それが千載一遇の機会であるからだった。

しかしケルトとしての性質か、相手が強ければ強いほどその神髄が見たくなり、敬愛し、刃を交わしたくなる癖がある。
今も尚死ねぬのは、呪いと相まって願いとは矛盾するその特性のせいでもあった。
清明はそんなスカサハの希求するものを知っている。何を欲し、求め、スカサハの願う終わり方を清明は見抜いているのだ。
「くふ、ああ。勿論知っているとも。俺とお前の仲だ、皆まで言わずとも何が言いたいかなど承知しておるさ」
実は清明とスカサハはよく共に行動する事が多い。
それは戦闘面だけではなく、カルデアに居る時も、今のようにして食事を一緒に摂ることが何度かある。
魔獣跋扈する影の国に君臨し、数多の勇士英傑を育て上げたケルトの大英雄スカサハ。
魑魅魍魎を束ね平安京を守護し、程度の差はあれ、後に名を残す英雄の幾人かを育て上げた安倍清明。
同じく魔の上に立つもの、師としての顔を持ち合わせるもの同士、話題には困らない程度には仲が良いのだ。
ついこの間など、互いの弟子の不肖さで盛り上がったばかりだ。
「キャスターのお主に言うのも我ながらどうかとは思うが。クラスが故の惰弱さなど、お前なら問題にはならんだろう？」
「高く評価されたものだな。光栄に思うよ。しかしな、生憎と俺はその手の趣味を持ち合わせてはおらんよ」
いやはや残念だ、とわざとらしく肩を竦める清明。
全然残念そうではないが、しかし事実として清明が自分で言う通り戦闘狂の気は一切持ち合わせていない。
清明に言わせれば劇や雅楽と同じで、自分で行うよりも他人同士で行われているものを見物するに限るのだ。
そちらの方が面白いし、もしかしたら予測もしないような面白い戦いになるかもしれないからだ。
言わばそれはシナリオのない舞台であり、清明は何処までもその舞台の観客でいたいのだ。

無論、やらなければいけない時は清明とて戦うが、そこはそれだ、やるべき事とそうでないことの線引きがハッキリと定まっている。
そもそも、生前は殆どが戦に発展する前に潰していたし、いざそうなってみても式神に任せて清明は高みの見物をしていた。
例外でいえば玉藻の前や蘆屋道満ぐらいなものだろう。
「やはり乗らぬか……。では、こうしよう。お主が話に乗ると言うなら、閨を共にしてやってもよいぞ」
だが、ここで引かぬのもまたスカサハだ。
今の言葉をクーフーリン辺りが聞けば、もしかしたら目を見開いて驚愕するかもしれない。
スカサハという女は、勇士である存在を好む。
それは蛮勇に非ず、ただの戦士に非ず、勇気を持つ戦士こそ彼女の好む存在だ。
故に、それのどれにも当てはまらない清明にこうまで言うのは、例外中の例外。
ともすれば好みに当てはまらぬ中では、彼一人だけなのかもしれない。
「ふふ、諄(くど)いな。何度言われようが受ける気は――――ああ、いや待て。……ふむ、その話に乗ろう」
再度断ろうとして、突然言葉を反転させた。
直後だった、清明達の居る卓から少し離れた場所で少し大きな物音がした。
それを耳にした清明は口角を吊り上げて、その場を立つ。
「閨どうのと、その話は兎も角としてシミュレーションルームへ行くぞ」
「ほう……一体何があって返答を変えたかは知らぬが。まあいいだろう、礼を言おう」
歩き始めた清明に合わせるようにして、その後をスカサハは追う。
こうして二人は食堂から出て行った。
「――――後を追ってみようよ」
「先輩、私はやめた方がいいのではないかと！　それと横のタマモ

さんが何か怖いです！」
「おや、マシュちゃん気の所為ですよ？　タマモはみこっと何時もの良妻賢狐、一夫多妻（ハーレム）を許さぬ正義の狐！　なので、ええ気の所為ですとも」
話を聞いていたであろう三つの影は、静かに食堂を出て行った。
☆
シミュレーションルーム。主に戦闘面において駆り出されることの多いサーヴァント達が、日夜ここで研鑽を積み、また体を動かす為に利用する訓練室。
高度なヴァーチャルリアリティシステムを用い、カルデアに記録されているものなら本物と見分けがつかないレベルで再現が可能であるここならば、多少の無茶は何とかなるだろう。例えば、影の国の女王との戦闘など……。
「俺は勇士では無い故、そこは容赦せよスカサハ。そうさな、望みには添えんが、楽しませる事は約束しよう」
平原を模した空間の真ん中、互いに向かい合うようにして立っている。
揺れる柳のように飄々と捉え所のない顔を崩すこと無く、朱く朱く荘厳な槍を持つスカサハを見据えていた。
「無理を申し出たのはこちらだ。確かにお前が我が槍を授けた者であるならば、それ以上の喜びはなかったが。贅沢は言わぬ。それとも、今からでも儂の師事を受けてみるか？」
「くふ、ははは。面白いことを言う。心にないことは言わぬ方が良いぞ」
「なに、冗談だ。お主と居ると、偶にはお主の真似をしたくなるのだ」
「ふふ、そうか」
清明は兎も角として、スカサハのやり取りから彼女が浮ついているのが分かる。
宿願の大成か、単に戦士としての昂りか……両方か。
今こうして相対する空間の中で、スカサハは自らの四肢に抑えようの無い高揚を感じていた。

――そして、声が消える。
空間には異様な静けさと、槍のように鋭く宙を支配する殺気だけ。
針の筵(むしろ)に立たされているような気さえする中で、清明は変わらず実体の掴めぬ霧のように立つだけだった。
向けられる殺意と闘気に圧をぶつけ返す訳でもなく、ただそこに居る。
いつもの笑みを貼り付け、その瞳でスカサハを捉え、愛でるように見据えている。
「――往くぞ」
大地を踏み砕く音が響いた。
直後に、ギィィィ――！　と空間が悲鳴を上げた。
舞い上げられた砂塵を掻き分けてみれば、無謬なる槍の穂先が清明の喉元を捉えている。
しかし清明の顔色が変わることは無い。
槍の穂先は、清明には届いていなかった。
目に見えぬ壁が、命を貫こうとした槍を寸でのところで拒絶したのだ。
スカサハも初撃を防がれる事は承知だったのか、驚いた様子はない。
「はっ！」
「――力技か」
防がれるなら一旦引くのが常套。だがスカサハが行ったのはその真逆。
更に間合いに踏み込み力を込め、槍の先を無理やり押し込んだ。
一点に集中した力の流れは、徐々に清明の障壁に罅を刻み込む。
そうして距離をとったのは清明だった。
「急造とはいえ、今のを破るか」
感心したように、眼前の女戦士を見据える。
今清明が展開したのは、単純な障壁だ。術式が簡単で、それこそ素人である立香でさえ作れる簡単な陰陽術。
だが逆を言えば簡単である分、その硬度や完成度は術者の実力に左

右されやすい術でもある。
未熟者が使えば紙よりも薄くなり脆いが、術者が清明であればそれは低ランク宝具程の強固な守りとなる。
それをただの力技で砕き掛けたのだから、スカサハの実力も伺えるというものだろう。
「相変わらず容赦ねぇな」
呟いたのは、隣接する制御室から観戦していたクーフーリンだった。
清明達を追う道中、偶然見つけたのを立香に引っ張られて、玉藻の前やマシュと一緒にその映像を見るに至ったのである。
「開幕そうそうに頸とか、並の相手ならそれで終いだぜ」
「スカサハさんらしいと言えば、らしいのかもしれませんが……」
キャスターを相手にいつもの調子である己が師匠に、呆れたように言うクーフーリン。マシュもそれに同調するように、少し苦笑いをしながらスカサハをフォローする。
そんな事を呟きながら、四人が続きを見ていると、場面はスカサハの猛攻を清明が身ごなし軽やかに避けていた。
「――せいっ！」
「っ……ふふ、熱いな」
烈火の如き熱量と、暴雨が如き連撃。
一撃一撃の繋ぎが鮮やかで途切れることの無い槍の嵐は、風を裂く鋭い音と共に激しさを増していた。
それを清明は紙一重で交し、時に受け流し、回避に徹する。
一見すればスカサハ優勢に見えなくもない光景は、しかし清明の涼しい顔を崩せてはいない。
つまりはまだ余裕であること、趨勢は決定していない事の証明だった。
このままでは埒が明かないと思ったのか、スカサハはもう一つの朱槍を取り出した。
ここから徐々にペースを上げていくぞ、という事なのだろう。
「避けてばかりか。女一人に踊らせて、お主は見ているだけか？」

「くふ、言ってくれるな。いやさ、お前の鮮烈な舞に見とれていただけだよ。しかし、同じ舞台にいるのは俺も同じか。――では、俺も踊るとしよう」

言うやいなや、清明は右手の中指と人差し指を立て刀に見立てた。

破邪の法『刀』。大衆が想像するであろう陰陽師の呪法の型だ。

そして綴られるのは力を宿した言霊。古来より日本に息衝く、古き神秘。

「帰命したてまつる　甘露尊よ、祓いたまえ、浄めたまえ」

唄うように。雅楽を奏でるように。

一言一言紡ぎ出されるそれは、まるで脳に直接流れているかのように、意識に焼き付いていく。

緩慢に、然と唱えられ、体の奥底に深く焼き付く。

「笑声金剛よ。祓いたまえ、浄めたまえ」

一小節が区切りを終える。継いでは厄災消滅せし、祓魔の祝詞。

「不空なる御方よ　毘盧遮那仏よ
偉大なる印を有する御方よ　宝珠よ　蓮華よ
其は星なるや　光明を　放ち給え」

ここに、呪法は結ばれる――。

「――汝に、祝福あれと！」

刹那、空間が捻れ狂った。

「……っ!?!!」

スカサハがそれを避けらたのは、もはや直感。

幾多の窮地で鍛え上げられた戦士としての勘と、数多の修羅神仏を叩き伏せてきた英雄としての本能が、未来視レベルでの回避を成功させた。

緩慢だと感じていた詠唱は、高速真言で唱えられていたものだった。

常人では聞き取れないはずの速度の言葉は、しかしスカサハも管制室の四人にもハッキリと一言一句がその身に深く刻まれている。

見れば、先程までスカサハが立っていた場所は消滅していた。

跡形もなく吹き飛び、大きく窪ませクレーターを形成している。

まるであそこに隕石でも落ちたかのような衝撃と、言葉を失う程の破壊跡だった。
「許せよ、スカサハ。俺とお前とでは踊る演目が違う故に。そちらが荒舞を織り交ぜた女舞であるならば、こちらは狂言となってしまう。少々勝手は違うやもしれんが、今度は俺に付き合えよ？」
ゾッと、魂が鷲掴みにされたような悪寒を覚えた。
諧謔を含ませた清明の透かした顔に、スカサハは遂に堪えきれぬとばかり吹き出す。
「――ふ、ふふ、ははは！　　ああ、良いぞ。実に良い。お前か、お前が私を殺せるものなのか。そうか、ならば、ああならば何処までも踊ってやろう」
「くふふ。いい顔をするではないか、まるで初恋を知った乙女のようだぞ。美しいな、やはり役者は華が如くあってこそよ」
共に笑い。共に狂喜し。共に舞い踊る。
スカサハは戦の愉悦と大願成就を前に。清明はスカサハの在り方を讃え、その美しさを前に。
互いに相手の存在に酩酊している。深く深く、酔っている。
整えられた舞台の上には、役者は二人だけ。
シナリオは無いが互いに目指す幕引きがある。ならば、後はそこに行くまでひたすら踊るだけだ。
☆
「おいマスター、こりゃあ止めた方がいいぜ？　　このままヒートアップしたら、空間が持たねぇ」
モニターの二人を、というか主にスカサハを見て危機感を抱いたのは、クランの猛犬クーフーリンだった。
ああなってしまった師匠は、先ず間違いなく止められなくなるし、そも止めようとすれば容赦なく殺される。
しかしこのまま戦わせては、恐らくシミュレーションルームでは耐え切れない規模の戦闘になるだろう。
宝具なんて連発されればそれこそ、その瞬間にこの一室にはしばらく黄色いテープが貼られることになる。

クーフーリンの言葉を聞いて、立香は頷いた。
「うん。マシュ、おねが――ひっ」
こういう機器の扱いに長けた自慢の後輩に頼もうとして、横を向いた立香は短い悲鳴をあげた。
「フ、フフ、フフフ……」
狐が笑っている。黒い笑みを浮かばせて、眉をピクピクと動かし笑っている。
――否、違う！　これはブチ切れているのだ！　立香は直感で分かった。
「あら、どうかなさいましたか、ますたぁ？」
この甘く艶かしい言葉遣いが余計に怖い。まるで甘い匂いを漂わせる毒のように、ただひたすらに怖い。
隣に居たからかマシュなんて泣きそうにオロオロしている。
止めなくては。シミュレーションルームどうこうの前に。面倒が起こる前に。
自分が所長に怒られることだけは、何としてでも回避しなくてはならない！
思った時には、立香の体は動いていた。
緊急停止、と上に書かれたボタンを立香の指は押していた。
……しかし。
「あ、あれ？」
何度押しても、緊急停止機能が作動することは無かった。
まずい壊れたか？　たらーっと設備を壊して怒られる自分を幻視し汗を流す。
だが、幸か不幸か、それを否定したのはマシュだった。
「大変です先輩!?　外側(こちら)からは干渉できないように魔術が使われた痕跡があります！」
どうやら初めからバレていたらしい。
立香は己の背筋が冷たくなるのを感じ、叫んだ。
「お、おのれぇぇ清明ぇぇぇ――――!!」
☆

（そろそろ気付く頃合か）
今頃冷や汗を流し、己の名を叫んでいるであろうマスターに向けて内心で笑う。
初めから立香達が自分達の話を盗み聞きしているのには気付いていた。そしてそこに玉藻が居ることもだ。
そう玉藻だ。清明からすれば博雅の次に弄りがいのある相手だ。
だからこそスカサハが閨がどうのと言い始めた時、断るのをやめ誘いに応じたのだ。
「さて、ではこちらから行くぞ」
清明は思考を一旦切り離し、目の前の女に意識を向けた。
そして両の手で印を結ぶ。
唱えられるは魂焼く焦熱の真言。不浄を焼き、肉体を溶かし、罪炙る日輪の熱。
「両界曼荼羅・東嶽大帝、寶意天子（ほういてんし）、唵！　――――奉天・大光明遍照！」
瞬間――太陽が顕現する。
ソレの直撃は避けられないと悟ったスカサハは、無数のルーンを重ね急造の盾となし後ろへ飛んだ。
そして日輪は地へ落ちると、視界に移る全てを喰らい尽くした。
空間を、ともすれば世界そのものを揺らしているのではないかと錯覚する衝撃が響き渡る。
光にやられた眼が機能を取り戻した時、目の当たりにした光景に立香達は息を呑んだ。
……地形が姿を変えている。まるでここだけが天変地異に見舞われたかのように、生命の一切が焼却されていた。
確かに、これが続けばシミュレーションルームは持たないだろう。
しかし外側からではどうすることも出ない状況では、ハラハラとただ見ているだけしか出来ない。
「流石よな。影の国に君臨するだけはある」
立ち上る煙と砂塵が止むと、そこには血だらけのスカサハが立っていた。

満身創痍といった風体だが、傷を負っていたのはスカサハだけでは無かった。
ポタリ、ポタリ、と清明の右肩から大量の血が流れていた。
清明が褒め称えていたのはスカサハが大光明遍照を耐えたからではなく、清明の攻撃を受けながらもカウンターを入れる形で宝具を叩き込んだからであった。
日輪に飲まれながらも、貫き穿つ死翔の槍を心臓目掛け撃ち込んだのだ。
朱槍は常時何重にも展開していた清明の結界を貫通したが、槍は威力を落とし定められた因果がねじ曲がってしまった。
清明の胸を穿つことが出来なかったのだ。
「仕留め損なったか。やるな清明、お主は勇士ではないが、ああそれに勝るとも劣らぬ男よ」
「はは、よせお前ほどの女に言われては、空虚なこの胸も高鳴るというものだ」
その時清明は背中に鋭い視線を感じた気がしたが、少し笑って無視した。
「さて、今宵の舞台もそろそろ終幕と相なろう」
少し思わせ振りに言う。
互いに打ち合ってそろそろ四半刻（30分）が経とうとしていた。
「ああ、こんなにも高揚したのはいつぶりか。我が槍の全てを持って、お前を下そう。願わくばこの果てに我が望みを叶えてくれ、清明！」
「くふ――来るがいい、影の国の女王」
声と共に清明の周囲を転輪していた無数の太陽が、降り頻る雨となって落ちた。
「――っ、はあぁあ!!」
影をも喰らう幾条の陽の柱。
触れれば必滅をもたらす奉天の御柱。天を照らす日輪の熱量は、地上にとっての地獄に他ならぬ。
それを躱し、切り裂き、時に受け止め、着実に一歩を届かせる。
紅き牙をその胸に突き立てようと、影の国を統べる英傑は獰猛なま

でに美しく笑う。
そして清明との距離があと僅かというところで――焔は翔(はばた)いた。
「帰命したてまつる。あまねき諸仏(ノウマク・サマンダ・ボダナン)に。
遍満輝きたまえと、天輪成就也(アビラウンケンソワカ)！」
それは陽(コロナ)の翼。天に座す陽の星が伸ばす、超純度の炎。
翔きの起こす風にさえ人では耐えられぬ熱の抱擁に、スカサハはルーンで最低限の防壁を張り覚悟を持って、コロナの中に飛び込んだ。
熱いなどと、もはや感じることすら出来ない熱量。
皮膚が焼ける、肉が溶かされる、眼球の水分が蒸発して右の視界はもう何も見えなくなっている。残った左ですら、世界の輪郭がぼやけているのだから、持ってあと数分か、数秒か。
このような弩級の占星術ですら宝具でないというのだから、呆れを通り越して笑えてくる。
これこそが冠位を賜る英雄の本領。
――スカサハ(おのれ)を殺せる者の力。
ふっ、と自然と笑いが込み上げてきた。実力が拮抗……いやそれ以上の輩とまみえるのは、何千年ぶりだろうか。楽しい、楽しい、楽しい。
サーヴァントの身でおかしな話だが、久方ぶりに生と言うものを感じる。
「届いたぞ明星――『貫き穿つ死翔の槍(ゲイ・ボルグ・オルタナティブ)！』」
影の女王は、呪われた輝きを持って槍を伸ばし――。
「ああ、信じていたとも。影の女王」
死翔の槍は明星の因果を捉えることは出来なかった。
「がはっ!?」
既に呪を唱え終わった清明は、スカサハの鳩尾に掌底を落とした。
既に気力も体力も文字通り全てを出し尽くしたスカサハは、清明の胸の内に吸い込まれる。
「ふふ、ああ私がこうも倒れるなどいつぶり……もしや初めてか？」
「倒れ伏す時も前のめりとは、いやはや天晴れ。恐れ入るよ」

清明の腕に支えられて彼の軽口を聞き流しながら、スカサハはきっと目を鋭く清明を睨んだ。
「……して、どういうつもりだ？」
「はて、なんのことか？」
「なぜ、なぜ私の体を修復している？」
スカサハが清明を睨んだ理由。それは、清明が己を殺さず治癒し始めたからだ。
もとよりスカサハはこの戦いに全てを掛けていた。無論それは清明とて同じことだと、そう思っていた。
サーヴァントの身であっても、清明はそれを貫通して生身のスカサハを殺せたはずなのだ。
故に何故己を殺さずに居るのか、望みを知りながらなぜ生かすのか。
それとも侮辱しているのかと、憤慨が込み上げてきたのだ。
「舞台が終われば、演者を労るのは至極当然の道理であろう？」
「なにを――！　そういうことか……」
スカサハは思い至る。この戦いは端から目指すものが違っていたのだと。
なぜ清明は己の誘いに乗った？　なぜ途中になって答えを変えた？　――清明は此度のことをなんと言っていた？
舞台だ。確かにそう清明は言っていた。そして演目が違うとも言っていた。
いや、何よりも清明は――殺す事は可能ではあるが、今出来るとは一言も言っていない。
だんだんと回復していく思考でそれに気付き清明を見やると、してやったりと悪戯が成功したような顔をされた。
「食えぬ男よな」
「くふふふ、俺を食えるのは騙しの得意な狐だけよ」
「そうか、初めからそれが目的か」
「ああ。狐めが盗み聞きをしているのには気付いていたのでな、逆につまんでやろうという悪戯心よ」

つまりスカサハはその悪戯に利用されたということだった。
全ては自作自演、狐を揶揄うために付き合わされたのだ。
ここまで諧謔が過ぎれば怒りを通り越して失笑ものであろう。
全く付き合いきれんと、スカサハは息を吐き出した。
「だが、今の踊りは楽しいものであったことは事実。そうさな、影の。その生に辟易しているのやもしれぬが、世の中はまだ存外に捨てたものでは無いだろう？」
「――っ！　ああ、全く持って思い知った」
それだけではなかったようだ。
この安倍清明という男は、スカサハの願いを肯定した上でもう暫く生きてみろという。なんと酷い人でなしだろうか。
しかし、たった今清明と戦い幾千年ぶりかの生を想起した。
確かにあれをまた味わえるのなら、世の中は捨てたものでは無いかもしれない。いや、捨てた覚えは無いが。
少なくとも、私を殺せるものがもしかしたら居るかもしれないという希望をまた気紛れ程度には持ってみようという気にはなった。
「もし、時が来たのならば。それでも死にたいと願うなら、その時は俺が場を整えてやろう」
「ふふ、ああ、いいだろう。それまではお前にも付き合ってもらうぞ、清明」
「是非も無い。ふむ、やはりお前は美しいな」
話している内に、スカサハの負傷はすっかり消えた。
それを清明は確認すると、その場を後に歩き出した。
「どこへ行く？」
「くふ、狐も我慢の限界だろう。今度は俺がつままれに……いや、抓られに行くさ」
「ふむ、前に言っていたな。それがお前の愛と言うやつか？」
「くく、違うさ。俺が愛するのは真葛であって、狐は愛でるものだよ」
軽い会話を交わしたのを最後に、清明はシミュレーションルームを出ていった。
☆

一方その頃、隣接する制御室では。
「お、落ち着いてタマモ！　清明のあれは浮気じゃない……と思うよ！」
「は、はい清明さんはそんな人ではないかと！」
「浮気移り気結構！　ええ、私はあのド腐れ陰陽師とは関係ありませんので。ですが！　彼の妻の為、変わりに正義執行（ジャッジメント）の去勢拳（らいだーきっく）は必要かと」
「ちょ、クーフーリンも手伝って」
「あいよ。……女ってやつは、怖いねぇ」
その後、清明が笑いながら機嫌の悪い玉藻の横で夕食を摂っているのを、立香達は見たのであった。

華咲く童うた

ある日の昼下がり。
昼食を終えたサーヴァント達は、皆それぞれの時間を過ごしていた。
日課のトレーニングをこなす者も居れば、真昼間から酒を仰ぐ者やライブコンサートの為にボイトレをしようとして止められる者まで、このカルデアでは千差万別の日常がそこかしこに転がっている。
そんな中で、小さき三つ影が愛らしく元気に集合していた。
「喜んでくれるかなぁ？」
「きっと大丈夫よ！　ええ、心込めて皆で作ったんですもの！」
「そうです！　ちょっと失敗もしちゃいましたが……きっと大丈夫な筈です！」
「うん！　そうだね。よぉし、行こう！」
上から順にジャック・ザ・リッパー、ナーサリー・ライム、ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリィである。
万夫不当、古今東西の英雄が集う天文台において数少ない子供組の三人だ。
三人が話し合っていたのは手に持つ小さな箱の中身の事。
箱の中は、今この場には居ないがポール・バニヤンを加えた四人で作ったケーキが入っている。
種類としてはシンプルなイチゴのホールケーキ。今日この日のために藤丸立香やエミヤ、ブーディカに教えて貰って子供達で作った大事な一品だ。
その送り先は、驚くなかれ安部清明である。
実は清明、このカルデアの子供達からかなり慕われており。特に古参であるジャックは清明の事をおじいちゃんと呼び、まるで本当の祖父の様に懐いていたりする。
頼光の幼少期に纏わる逸話からも分かる通り、清明自身も子供好きである為、よく子供達に飴やお小遣[Q][P]いをあげている。
「着きました！」

「ドキドキするわね」
「う、うん。よし、行くよ」
狭いカルデアでは、清明の部屋に着くのに時間は掛からなかった。
ドキドキと、感じたことの無い緊張感と不安が三人の内を巡る。
特異点修復において戦場の只中で感じる物とはまた違った、恥ずかしいような楽しみなような、そんな感じのもの。
『初めて誰かに物を送るというのは、少しばかり勇気がいるものだ』
とは、ケーキ作りを手伝ってくれた厨房の赤いおじさんの言葉だ。
なるほど、これは確かに勇気が必要だと、ジャックは思った。
幼い三人はプレゼントを送られることはあれど、誰かにプレゼントをあげるというのは余り経験が無い。
オルタリリィはサンタという経験上その限りではないが、それはそれクリスマスの話だ。
クリスマスではプレゼントを与えるのが常識であるが故に、それに倣ったに過ぎない。
だが二月二一日、今日という日は別だ。クリスマスでもなければ他の誰かにとっての祝日という訳では無い。
誰か個人のためだけの祝い事に、それも合作とはいえ初めての手作りの品を送るのだから、この緊張も然るべきものだろう。
一歩。扉の前に立つと、センサーが反応して自動的に開いた。
「お、おじゃましまーす……」
声を抑える必要は無かったが、オルタリリィは自然とそうなってしまった。
中へ入ると、出迎えたのは優しい匂いがする広い和室だった。
生けられた美しい花に、すべすべの畳、壁に吊るされた掛軸には綺麗な絵が描かれている。
清明が教えてくれたその絵は鳥獣戯画というらしい。
いつ見ても不思議な絵だと、オルタリリィは思った。
「居ないね」
「きっと奥にいるわ。おじ様のことですもの、今頃小鳥でも見ながらお茶しているのだわ」

清明がこの和室に居ないことを確認した三人は、さらに奥へ続いている襖へ手を掛ける。
襖の奥には廊下が続いており、部屋も幾つか存在していた。
キョロキョロと、オルタリリィの目が忙しなく動く。
実はオルタリリィは、古参のジャックやナーサリーと違って清明の部屋に来たことがあまり無い。
それゆえ、物珍しさと好奇心から視線が止まらないのだ。
ふと、オルタリリィはある事を思い出す。
外見的にも物理的にも可笑しい程の広さを誇る清明の部屋は、一種の結界だとマシュが言っていたのだ。
空間を無理矢理拡張させ、収まらないはずの異空間を無理やり形成し貼り付け、それがあたかも自然であるかのように世界の認識を誤魔化しているのだとか。
だから部屋の中なのに空もあれば生物も存在しているらしい。
はっきり言ってオルタリリィからすればちんぷんかんぷんなのだが、ただ何となく凄いことなんだろうという事は理解出来た。
と、そんな事を思い出しているうちに、一つの襖の前に辿り着いた。
これは縁側に繋がっている襖だ。
ゴクリと、ジャックが生唾を飲み込みいくよ、と意気込む。
そして……バッ！　と勢いよく襖を開けて――。
「おじいちゃんお誕生日おめでとう！」
「おじ様お誕生日おめでとうなのだわ！」
「清明さんお誕生日おめでとうございましゅ！」
その勢いのまま、元気よく声を揃えた。
若干一名だけ噛んでしまい、その事に顔を赤くしてしまっているが、勢いに任せて有耶無耶にしようとしていた。
飛び込んできた幼い華達を前に、清明は驚くこと無く三人を受け止めた。
「くふ、威勢のいいことだ。態々ここまで祝いに来てくれたのか？」
「うん！」
「くふふ、そうか。ありがとう、感謝しよう。だが、あまりはしゃぐも

のでは無いよ。手に持っているそれは大事なものなのだろう？
落としては元も子もあるまいよ」
バッ、と清明の胸元から勢いよく顔を上げるジャックは慌てて手に持っていたケーキの箱を確認する。
どうやら無事なようだ。良かったと、ほっと一息つくと体を離した。
「あのねおじいちゃん、今日おじいちゃんのお誕生日だから皆でケーキ作ったの」
「ほう、ケーキか。それはお前達三人でか？」
「うん、あとバニヤンも一緒に」
「ふむ、それは楽しみだ。だがバニヤンが居ないようだが……？」
「バニヤンはちょっと、おかあさんと一緒にお仕事で来れなくなっちゃった」
「ふふ、そうか。それは残念だ」
フッと笑い、悲しそうな顔をするジャックの頭を清明は撫でた。
かつて幼い頃の頼光にしていたように、優しく元気付けるように。
頭を撫でられたジャックはすこし擽ったそうにしながらも、嬉しいのか少しほの暗く翳っていた顔が晴れていく。
それを見た清明は、大丈夫だと判断し手を離した。
「では、早速だが馳走になるとしよう」
清明がそう言うと、少し慌てたようにオルタリリィが声を上げた。
「そ、その、今回色々と初めてで上手く出来たかどうか分かりませんが……」
「なに、きっと大丈夫だろうよ。それに、贈り物とは何よりも気持ちが大事なのであろう？　なあ、サンタ殿？」
「――は、はい！」
「くふ。では、中へ戻ろうか」
清明が立ち上がると、続くように子供達は廊下へと戻っていく。
風の子軽やかに、賑わい跳ねる様相まさに童唄。
琵琶の風情にも負けず劣らずの雅楽に聞き入りながら、清明はゆったりとした足取りで子供たちの後を追った。

☆

「く、何故私がまたこんな目に……」

恨みがましく清明を睨みつけるているのは、毎度巻き込まれるでお馴染みの玉藻だった。

何故ここに玉藻がいるのか。それを簡潔に述べるとこうである。

きよひー&おっきーこと清姫と刑部姫、それに鈴鹿御前を加えた四人で談笑していた所、突然玉藻の足元に方陣が出現。

あまりの出来事に一瞬フリーズしたが、その方陣は清明(あの男)を象徴する清明桔梗(セーマン)だと気付いた時、即座に呪詛による術式の破壊を試みた。

が、悲しきかな。そんなことはお見通しとばかりに、干渉してきた玉藻の魔力を会して呪詛返しを行い動きを封じられてしまう。

そしてその顛末が、清明の元への強制召喚という結果であった。

「あ、おばあちゃん」

「どうわあれがおばあちゃんですか！　ちょっと、貴方のお陰で私要らない火傷を負いそうなのですが……何とかしてくれません？」

「ふふ、そう大差あるまい。さして俺と歳も――」

「そおい！」

その先は言わせないとばかりに、魔力と呪詛が濃密に圧縮された氷柱を清明目掛けて飛ばす。

しかしそれは清明が何をするでもなく、触れる直前になって霧散してしまった。

そして玉藻の攻撃が通じなかった事に、ニヤニヤと清明は笑みを向けてくる。

ああ、なんと腹の立つ顔なのだろうか。もし視線だけでこの男を呪えたなら。

玉藻はそんな事を考えずには居られなかった。

「はぁ。それで次は一体何の用なんです？」

「この光景を見て理解が出来ないほどの愚鈍でもあるまい？」

「あのですねぇ、私は給仕ではありませんので。お茶なら蜜虫ちゃんにでも……」

「くふ、断る。存外にも俺は――狐の茶が好物らしいのでな」

間髪入れず、真剣な顔でそう言われてしまう。
「――っ、はあ。もう、仕方ありませんね。どうせ、淹れるまで返してはくれないでしょうし。はいはい、やりますよ」
分かっていたが、結局自分が折れる形となってしまった。
本当に清明という男は苦手だと、玉藻はつくづく思う。
そして同時に、食い気味で言われた今の言葉に、自身の霊基が喜んでしまっているのにも気付いていた。
（まったく……。昔から口だけは上手い男なんですから）
そういつだって口が回る男だった。
在りし日の真葛をからかい怒らせたかったのかと思えば、途端に口説き文句を並べ始めたり。
相手にしている方が馬鹿らしくなるほど、口達者に飄々と気持ちを見透かしてくる。
何度苦労させられたことか。
霊基に刻まれた記憶を巡る度に、ため息が漏れそうになった。
そして、このままではダメだと、かぶりを振ってさっさと茶器の用意に掛かる。
いつか泣かす。そう心で呟きながら、玉藻は無自覚に微笑みを浮かべていた。

「さて、頂くとしようか」
清明が皿に置かれたデザートフォークを手に持った。
ちゃぶ台の上には人数分の小皿が並んでおり、小皿には均等に切り分けられた不格好なケーキが置かれている。
ゆっくりとケーキに向かっていくフォークを、ちびっ子三人衆は固唾を呑んで見守っていた。
まるで世界がスローモーションにでもなったかのようだと、三人は錯覚する。
ジャックは緊張しながも恥ずかしそうに。
ナーサリーはワクワクと擬音が視認できそうなほどの笑顔で。
そしてオルタリリィはというと……。

――早く食べて欲しい。けれど、やっぱり食べて欲しくない。でもせっかく作ったのに……。いやでもそれで不味かったら……。
そんな自問自答を不安げな顔で先程から繰り返していた。
そして遂に、ケーキが清明の口に運ばれた。
「「……ッ」」
一回、二回、三回、規則正しく咀嚼していく清明の顔からは感想が伺えない。
もしや不味かったのだろうか？　ただ黙々と食べる清明を見て、三人の頭にそんなことが過ぎった。
「ふむ、少々甘いな。……だが、ああ、美味いよ。よく頑張ったな三人とも」
フッと口元を緩ませ笑った。
「「――や……ヤッタァァァ!!」」
ジャック達は声を重ねて、飛び上がった。
余程嬉しいのだろうキャッキャッと笑いながら、飛び跳ねる。
その姿は容姿相応であり、とても人理を守護する英雄とは思えない。
もしここにアタランテがいれば鼻血を吹き出すであろう光景だ。
そんな幼い子供達を眺めていると、不意にある記憶が清明の脳裏を通り過ぎた。
それは二人の子供の記憶。庭を駆け回り、快活に動き回る童のうたごえ。
真葛と同じ髪の色をした二人の少年の記憶だった。
「――くふふ」
「突然どうしたんです？」
「いやさ、昔を思い出しただけだよ」
「……ああ、そういう。それにしても、ほんと子供好きですね」
「なんのことだ？」
「甘いの、あまり得意ではないでしょうに」
「くふ。だからこそ、お前の茶が……っ」
湯呑みに入った茶を飲んだ時、僅かばかりに清明は動きを止めた。

そして次にはしてやられたとばかりに、静かに笑みを零す。
「おや、どうかしたんですか？」
玉藻の顔を見れば、しらばっくれるように小首を傾げていた。
「こちらのセリフだ、狐。お前は、俺を嫌っていると思っていたのだがな」
「いやーん、タマモ何言ってるのかわかんない☆　　……でも、そうですね、私も昔の事をほんの少し思い出しただけです」
そうか。とただ一言だけ答え、清明は視線を湯呑みの中の茶へと移した。
この茶葉は切れていたはずなのだが……と、笑みと共に茶を喉の奥で転がす。
その茶は、夫婦となった真葛が初めて清明へ出した茶葉のものだった。
あの時、あの瞬間より清明は茶というものが好きになったのだ。
「おじいちゃん！」
「む、どうした？」
自然な動作でジャックは、あぐらをかいていた清明の元へすっぽりと収まる。
「今度は一緒にケーキ作ろうね」
口元にケーキの滓をつけながら、そんな眩しい笑顔を咲かせた。
「あぁもう、ほらお口、付いちゃってますよ」
玉藻はやれやれと、そんな愛らしい童女の口元を拭き取る。
それが終わるとジャックはグイッと、玉藻の腕を引き寄せ。
「おばあちゃんも一緒に、皆で！」
「だから私はおばあちゃんでは……もういいですそれで」
結局否定することを諦め、しかしながら玉藻は困ったように美しく微笑んだ。
童たちに囲まれる二人の姿は、傍から見れば仲睦まじい家族のようであった。